

『見渡す限りの草原を抱いて』

—空翔ける羊飼いの群れシリーズ 2—

第一章 「歳時記」

それは突然のできごとだったと言っていいだろう。まさか、あのたっちゃんが死ぬなんて思ってもいなかった。神も時としてあまりにも残酷なことをする。

私は最近、研修生相手に文化史の講義をやっている。これはどうも局長の陰謀らしい。約束通りに宇宙艇のライセンスは取らせてくれたものの、任務で地上に縛り付けて、外へ出る暇を与えないつもりなんだろう。まあ、講義は講義でそれなりに面白いので、今のところとくに文句を言うつもりもない。

たっちゃんの悲しい知らせは、その文化史の講義の真っ最中に届けられた。

「至急、信州へ戻ってこいと局長の言葉です。」

「分かりました。」

正直言って信じられなかった。いや、信じたくなかったのかもしれない。

「…そういう事情なので、本日は休講とします。暫くここへは戻ってこれないと思いますので、今後の指示は担当講師に確認すること。」

ざわついた講義室で研修生達にそう言った時でさえ、まだ現実から逃げようとしていたに違いない。とりあえずエアカーを飛ばして信州局の自分の部屋に戻ってきた。少なくともここへ帰ってきた瞬間、私は1個人から文化部室長にならなくてはならないのだ。

「室長、お帰りなさい。」

そう言って出迎えてくれる部屋は、いつもとそう違いがある訳ではなかった。ただ、アリコちゃんが部屋の片隅で目を真っ赤に腫らしていることと、キャティに行っているはずの明子ちゃんが帰ってきていることが、私に悲しい現実を突きつけていた。

「佛木せんぱい…。」

「ご苦労様…、いやお帰りか。明子ちゃんも大変だったろう。でも、疲れているところ申し分けないけど、詳しい状況を話してくれないか。」

「はい…。」

明子ちゃんも元気がまったくない。それは仕方がないことだろうが、ここで落ち込まれても困るのだ。

「三好少尉はキャティの小惑星帯でアルトロン of の操縦を誤ったものと思われます。あたしが現場に行った時には、既に三好少尉の姿はなく、アルトロンも粉々の状態でした。あの状態で生存する確率は3%未満だというのがキャットテイルセブンでの話しです。」

「なんでアルトロンで行ったんだ？たっちゃんにはカリフォンを貸してあったはずなんだけど。」

「小惑星帯に行くんだったら小型のアルトロンの方がいいからと、キャティで交換したんです。まさか、こんなことになるなら、あの時に反対していればよかった。」

たぶん、今まで我慢していたんだろう。急に明子ちゃん目から涙が溢れてくる。

「ちょっと明子ちゃんには酷なこと聞くかもしれないけど、たっちゃんが小惑星帯に行ったのはやっぱり猫を捜してなのかい？」

明子ちゃんは返事をする代わりに小さく頷いてみせる。

「いや、ありがとう。明子ちゃん、暫く休んだほうがいい。」

とてもこれ以上、聞いていられる状態でない。自分でもどうかしてしまつたと呆れるほどだ。とりあえず明子ちゃんの前で取り乱したりしなかつた分だけ、まだ理性が残っているということだろう。とにかく科学部に行かなくては…。

「科学部に行ってくる。おそらく他のみんなは上に集まっているんだろうから。」

「あたしも行きます。」

「明子ちゃんは休まないと…。」

「いえ、でも行きます。」

「明子ちゃん…、そうか…、じゃ、一緒に行こう。」

のっそりと立ち上がる。とにかく身体が自由に動かないような、そんな感覚がまとわりついている。そのへんは明子ちゃんも同じらしく、いつもの元気な分、余計に動作がのろく見える。

しかし、うちの部屋の半分以上が、たっちゃんを知らない人間になっていて助かった。もし、みんながみんな私のようになっていたら、危うく業務が停止するところだったな。

そんなことを考えてちょっと苦笑いになる。

いつもなら階段を駆け登るところを、今日のはのんびりとエレベーターを待つ。早く行かなくてはと心は叫んでいるのだが、身体が言うことを聞いてくれない。明子ちゃんもなんだが辛そうなので、とても階段を登るのは無理だった。

やっと4階の科学部の部屋に入ると、既に大勢の人間が集まってきていた。私はその大勢の中から一際目立つくまさんを捜し出すとゆっくりと近付いていった。

「どうも、どういう状況ですか？」

「たつた今、局長から局葬にするという発表があったところ。葬儀委員長にはシモさんがなるらしい。」

「たっちゃんの家族には？」

「さっき連絡がついたばかり、たぶん葬式までには来ると思う。」

「そうですか…。」

くまさんは思った以上に落ち着いていた。私なんかよりたっちゃんと一緒にいた時間が長かった分、くまさんのダメージの方が大きいと思うのだが、そこはやっぱり人格の差か、辛そうな素振りなんか1つも見せない。

「そういえば、Ryo先輩の姿が見えないようだけど。」

「Ryoは任務があってこっちに戻って来られないらしい。さっき情報部のグレン大佐が情報部代表ということで挨拶に来たよ。」

「任務というと、例の何とかのという彗星の調査。」

「たぶんだけどね。」

こんな時くらい戻ってくればいいのに…。こんな時に任務が優先するあたりが、文化部と情報部の差なんだろうけど。

それにしても物凄い人数になってきた。いったい何人の人間がこの部屋につめかけているんだが見

当もつかない。たっちゃんってこんなに顔が広がったのか、改めてたっちゃんの人あたりの良さを

一緒に来たはずの明子ちゃんもいつのまにか人込みにまぎれてしまって、どこにいるんだかまったく分からない。

「ところで、なんでたっちゃんは小惑星帯になんかに行ったんだろう？」

くまさんが急に思いついたように訊いてくる。

「猫らしいよ。明子ちゃんの話によると、シュレディンガーの猫を捜していたらしいから。」

「どうして…って、訊くまでもないか…。あ、じゃあ、明子ちゃんは？」

「ちょっと見てもらえない。」

「そうか…。」

シュレディンガーの猫が完全に姿を消してから約2年。記録によれば、その間誰もその姿を見た者はいないという。明子ちゃんはその猫を捜すためにキャティに移り住んだのだ。

たっちゃんが任務でキャティに行く度に、明子ちゃんの猫捜しを手伝っていたことは薄々気が付いてはいたが、それがまさかこんな結果になるとは誰も思っていなかったはずだ。

「佛木、このあと私の部屋に来てくれないか？」

「いいけど、どうして？」

くまさんが他人を自分の部屋に呼ぶなんて、こんなことは滅多にあることじゃない。しかし、理由はなんとなく分かっていた。私自身も同じことを考えていたのだから。

「今夜は誰かと酒を飲みたい気分なんだ。」

「うん…。」

第一章 「歳時記」

H. 6. 20. MAR

第二章 「大脱走」

結局、たっちゃんの葬式からあれこれと雑用が舞い込んできて、研修所の講義を2週間も休んでいた。今日は2週間ぶりにやっと研修所に来ることができたのだ。

「どうも申し訳ありませんでした。」

「いえいえ、どうせ忙しいのを承知で頼んでいるんですから。それに同僚の不幸となれば仕方ありませんよ。」

私が受け持っているクラスの担当講師は、そう言って出席簿を取り出す。

「えーっ、それでですねえ。1人だけ講義に出てこない者がいるんですが、まあ、気にしないで講義を進めちゃって下さい。」

「出てきてないのは誰ですか？」

「小原田ですよ。ずーっと寮に閉じこもったまま出てこないんですな。所長には既に報告してありますから、そのまま通常通りやってください。」

あのお嬢さんか…。私が見た範囲では講義をさぼるようには見えなかったが、いったい何があったんだろう？

だいたい、研修所の規則では、体調不具合などのやむを得ない事情が認められない限り、講義を休むことは許されない。また、研修所は全寮制で、日曜日以外の外出も許可されないことから、まず講義をさぼるなんてことはできないはずだった。

きちんとした理由があれば、担当講師があんな言い方をする訳がない。ちょっと気になる。

「先生、久しぶりじゃん。どうしたんだよ、2週間も。」

小原田のことを考えながら講義室まで来ると、篁ちゃんに声をかけられた。篁ちゃんも受け持ちクラスの研修生の1人で、あの情報部の Ryo 先輩の弟でもある。

「同僚の葬式でね。篁ちゃんも会ったことあるだろう。情報部の三好少尉。」

「ああ、あの人か…。じゃあ、兄貴は帰ってきてたのか？」

「いや、任務があったらしくて、葬式には来なかったよ。」

「ふうん…。」

そういやあ、Ryo 先輩と篁ちゃんを並べて2人一緒に見るこってないな。以前はそれでもよく連れて歩いている姿を見かけたのに。

「そうだ、小原田が出てきてないという話したが、何か知らないか？」

「さあな、気になるなら本人に訊いてみろよ。少なくとも部屋にはいるはずだから。」

「そうか、じゃ、そうしてみるよ。悪いがクラスの連中には、もう1日休むと伝えといてくれ。」

「おいおい、まじかよ。」

「まあね、それから、これを配っておいてくれ。私がいけない間に読んでおくようにな。」

私は今日配るはずだったプリントを篁ちゃんに渡す。

「先生も物好きだな。ま、みんなにはうまく言っておいてやるよ。」

篁ちゃんはプリントを引っ掴むと、講義室の方に戻っていってしまう。その姿を見届けてから、私は事務室の方へ顔を出した。

「どうも…。」

「あら、佛木さん、久しぶりです。今日はどうしたんですか？」

「小原田美佐の部屋を教えて欲しいんだけど。」

「ああ、あの問題になっている女の子ね。ちょっと待って下さい。」

事務室の女性はこともなげにそう言うと、*POWLA*の端末器を叩いて簡単に捜しだしてくれた。

「2130号室です。佛木さんは分かっているとは思いますが、女子寮ですから必ず寮長に断ってから入って下さいね。」

「どうも、ありがとう。」

私は軽く頭を下げると、このあいだ起きた話しを思い出した。

確か人づてに聞いたので詳しくは知らないが、寮長がいなかった時訪ねてきた男子が、そのまま女子寮に入ってしまった、危うく退学処分になるところだったらしい。

幸いこの男子に悪意はなかったようだし、寮長の弁護もあって退学はまのがれたらしいが…。ことこの件に関しては講師と言えども例外はないので、気を付けておいたに越したことはない。

「こんにちは…」

「あら、佛木くん、久しぶりじゃない。あんたこの頃顔を見なかったけど何かあったのかい？」

「ええ、ちょっと…。同僚が亡くなったもので、その葬儀で…」

「三好くんだろ？あの子はいい子だったよ。どうして神様はああいういい子をすぐ連れていってしまうのかねえ。」

寮長はたっちゃんがここにいた時のことを覚えているらしく、ちょっと目頭を押さえつつ昔の話しを話します。

「歴代の副寮長の中であの子が一番素直だったよ。それにひきかえて今の子は駄目だねえ。」

いったい何が駄目なのかよくは分からないが、たぶんその子はそんなに悪くはないんだろうと思う。ただ、たっちゃんと比較されたらそう言われても仕方ないだろう。

「で、今日はいったいどうしたんだい？まさか私とお喋りするつもりでここに来た訳じゃないんだろ？」

「ええ、実は私が担当しているクラスに欠席者がいるんで、様子を見に来たんですが、女子寮に入ってもいいですか？」

「小原田美佐かい？あの子もいい子なんだが、あの子はここには向かないような気がするよ。もし、このまま退学にするかどうかという話しなら、あたしはこのままやめさせちゃった方があの子にはいいと思うんだけどねえ。」

「どっちにしても本人がどう考えているのかが分からなきゃどうにもなりませんし。性分なんですか、ああいう子を基本的に放っておけない性格なんですよ。」

「ま、あんたは昔から後輩の面倒見がよかったから仕方ないか。2130号室の行き方は分かってる？」

「いえ。」

「その階段を登って、一番奥の部屋だから。何かあったらすぐあたしを呼ぶんだよ。」

「ありがとう、おばさん。」

「お姉さんと呼びな。」

寮長は小窓から顔だけ出すとそう言った。その言い方は昔からまったく変わらない。

あの寮長がここに住み始めてからいったい何年になるのか知らないが、少なくとも10年以上いることだけは確かだった。毎年寮生の中から副寮長が1名選ばれるが、歴代の副寮長はみんなあの寮長の雑用係だった。

そう言えば、どういう訳だかシモさんも、くまさんも、たっちゃんも、そして私も歴代の副寮長なのであった。あとでそれが発覚した時、みんなして寮長の悪口大会になったことがあったっけ。寮長から聞いた通り、2階に上がって廊下をずーっと歩く、人気のいない寮というのもなんか奇妙な感じだ。

突き当たりに 2130 号室を見つけると、軽くドアをノックしてみる。中で人が動く気配はするが、返事は返ってこない。もう 1 度ドアを叩きながら、今度はこっちから声をかけてみる。

「小原田、佛木だけど、いるんだろ？開けてくれ。」

暫くすると内側から鍵を外す音が聞こえ、小原田がドアの隙間から顔だけ出した。

「先生、どうしたんですか？」

「どうしたじゃない。どうして講義に出てこないのか理由を聞きに来たんだ。入っていいか？」

「ええ、まあ、どうぞ。散らかってますけど。」

割と素直にドアを開けてくれたことに少々面食らいながらも、私はゆっくりと部屋に入った。本人がそう言うほど部屋は散らかっているとは思えなかった。まあ、女の子にしてみればやはり気になる場所なんだろう。

「先生、お茶と紅茶とコーヒーとどれがいいですか？」

「じゃあ、お茶。」

「ええっと、お茶も色々あるんですが、何がいいですか？」

「マテ茶。」

「マテ茶あー！そんな物ある訳ないでしょう。せめて番茶とか緑茶とか玄米茶とか普通のにして下さい。」

「マテ茶だって普通のお茶だぞ。」

「だってえ…。」

「分かった。何でもいいよ。」

何がいかと訊かれるから好きなお茶を頼むんだが、今もって素直に出てきた試しがない。

小原田が玄米茶を入れてくれている間、チラッと本棚に目をやると、ほとんどが資格取得に関する参考書だった。

「はい、どうぞ…。先生、何をみているんですか？」

私が本棚を見ていることに気が付くと、わざと立ち塞がるように本棚の前に立つ。

「まあ、座ったら？」

私は差し出された玄米茶を一口飲んで、そう提案してみる。私の提案はすぐに受け入れられて、お嬢さんは大人しく座った。

「で、どうして講義に出てこないんだ？どうせ、ここを卒業するのにあと半年もないというのに。」

「べつにどうしてという理由がある訳じゃないんですけどね。」

「じゃあ、出てきた方がいい。少なくとも卒業するつもりがあるんだったら、これ以上休むと単位取得が難しくなる。」

一応、そういうことは分かっていたらしく、私の言葉に素直に頷く。

「でも、ここを卒業するのもあまり意味がないんです。あたしの場合…。」

「どうして？」

「先生はあたしの希望所属先を知っていますか？」

「いいや。」

担当の講師からチラッと見せて貰ったことはあるけど、このお嬢さんの希望までは覚えていない。

「あたし、火星か月に行きたいんです。でも、あそこは定員が小さいらしいですし、ましてや新人じゃあ地上から出して貰えないだろうし、だったら、民間で行った方が早いんですよ。」

まあ、確かに当たっている。このまま順当にいったとしても、たぶん配属されるのは経済部か文化部。まあ、一部の例外を除いてまず宇宙に出るなんてことはないはず。よっぽど成績がいいか特殊能力でもあれば話しは変わってくるけど、このお嬢さんの場合はそれも望めそうにないときている。

「でも、うちの文化部の子で、キャティ勤務になっている子もいるし、まだ諦めるのも早いと思うけど。」

「それはそういう人もいるということで、必ず努力すればそうなるということではないでしょう。せめて、途中退学が認められれば、すぐにでも火星に行ってみるんだけど。」

なんとなく宇宙に出たくてライセンスまで取ったのに、未だに宇宙へ出ることができない私に似ている。よく考えれば、他人に説教ができるような立場じゃないって訳だ。

そう考えてしまったら、急にここにいるのが莫迦々々しくなってしまった。

「帰るよ。なんだか急に疲れてきた。玄米茶ごちそうさま。」

私はカップを置いて立ち上がった。

「先生、帰るんなら一緒に行って欲しいんだけど。あたし1人じゃここを出して貰えないから。」

「どこへ行く気だ？」

「どこへでも。とにかくここから抜け出せるならべつにどこでもいいんだし。」

「ドロップアウトしたら、もう2度とここへは戻ってこれなくなるんだぞ。」

「だから、もう戻ってきたくないんですってば。」

このお嬢さんが本気でそう考えていることは容易に分かった。目が真剣だった。そして、私が一緒ならそれが簡単にできるということも分かる。しかし、まだ何かが心に引っかかる。

「平凡な毎日よりも特別な明日が、あたしは欲しいんです。」

平凡な毎日…。毎日々々、業務日誌には異常なしの文字を書き続け、それが嫌でライセンスを取ったはずなのに、よく考えてみれば今もやっていることは大差なく、とてもじゃないけど特別な日々なんて出会えるはずがない。

結局、私は局長の手のひらの上で踊っているにすぎないのだ。今でも心の中に何か引っかかっているその何かが、このお嬢さんなら見つけてくれるような、そんな気がしてきた。

「よし、分かった。外へは連れていくよ。しかし、一つだけ約束して欲しい。決して自分からドロップアウトしないこと。」

「そんな虫のいいことが…」

「私に任せなさい。」

こう胸を叩いたものの、実際は自信なんかなかった。しかし、やってみても損はないだろう。特別な明日のためには…。

第二章 「大脱走」

第三章 「分岐点」

寮長には適当な理由をつけて、小原田のお嬢さんを外へ連れて出たのはいいけど、はたしてどこへ行ったらよいやら見当もつかない。

このまま局へ戻ったとしても、今はたっちゃんのこととみんな手一杯だから、このお嬢さんの相手どころじゃなくなるのが目に見えている。どこか適当な場所があればいいんだが…。

「どこか行く当てがあるんですか？」

「いや、それをいま考えているところなんだが。ところで小原田は最初どこに行くつもりだったんだ？」

「うーん、べつにどこって決めていた訳じゃないけど、誰か宇宙に詳しくってあたしを連れて行ってあげようなんて奇抜な人がいないかなあ…なんて思っていたんですけど。やっぱり、そんな人はいませんよね。」

宇宙に詳しくって奇抜な人…。奇抜な人ねえ…。奇抜かどうかは別としても、変わり者ならいるなあ。

「小原田を宇宙へ連れていってくれるかどうかは分からないけど、ちょっと変わった人なら1人いる。あの人ならことと次第によっては何とかしてくれるかもしれない。」

以前くまさんからキャティの大天才という妙な紹介をされて、仕事で会ったんだけど、確かに天才ときちがいは紙一重だということを感じさせるような人だった。

現在は前連邦委員長が残していった研究所で、なんだか訳の分からない研究をしているはずだ。

「どんな人なんですか？」

「ソルトリバー博士といって、元々キャティの出身なんだけど、訳あって今は地球で研究を続けているんだ。」

ムービングロードを適当に乗り換え、街の郊外へと向かっていく。研究所がある位置というのが、信州と言ってもかなり南に位置する為、一步間違えれば立ち入り禁止の関東の境目くらいにある。文化部の仕事は地味のように見えてはいるが、地上のことに関して言えば情報部並みのデータを扱っていると言ってもいい。現在の関東における放射能汚染度などは科学部よりも詳しいデータを持っていると思っている。少なくともそのデータによれば、あと3年のうちに関東地区への立ち入りが可能になるはずだ。もっともその前にもっと性能の高い放射能除去装置が完成すれば、その可能性はもっと早くなる。

ソルトリバー氏が最初この話しを聞いた時に、研究所の位置はこの関東がいいと言い出して、関係者を随分と慌てさせたという話だった。結局、ギリギリの場所に研究所を作ったことで本人を説得したらしい。

お陰で人目につかないという意味では、ここはこの上ない場所である。

「私もまだ2回しか会ったことがないからそんなに詳しい訳じゃないんだけど、とにかく博士に会ったら誉めた方がいいらしい。誉めれば誉めただけ調子に乗るタイプらしいから。」

「そりゃ、面白そうな人ですねえ。」

単純に面白そうで済めばいいんだけど…。

最後のムービングロードを降りて、ここから先は歩くことになる。こんな人が来ないような場所には、さすがにムービングロードは設置していないらしい。初めからこうなることが分かっていたん

だから、エアカーで来ればよかった。

「あたし、こーんな何もない所に来たのって初めてなんです。」

少しは驚くかと思えば、どちらかというとかえってお嬢さんは生き々とした表情になっていく。まったく…。

「ほら、そこの建物だ。」

「えっ…。」

ま、無理もないか。この私だって最初くまさんに連れてこられた時には同じ反応をしたのだ。

「そこ、見えにくいから注意…。」

「痛っ…！」

派手な音と小原田の叫び声。だから、注意しろと言おうとしたのに…。

くまさんの言うところによれば、これはソルトリバー氏の趣味らしいんだ。とにかく妙な仕掛けを作るのが好きとかで、この研究所の建物は保護色のような物で覆われていて非常に見づらい。原理はよく分からないけど、注意して見ていないとこうやって壁にぶつかる。

実を言えば、私も初めてここに連れてこられた時には、小原田と同じように建物の壁が見えずに思いつきり頭をぶつけたのだ。

「何よお、これ。」

「だから注意しろと言おうとしたのに。ここがソルトリバー研究所だよ。」

「えーっ、どうして見えないのよお。先生、よく分かりますねえ。」

「見えないんじゃないくて、見にくいように工夫してあるだけだよ。ほら、ここを見ればなんとなく分かるだろう。」

私は地面を指差して見せる。この時間なら日差しが強いので割と分かりやすい。

「建物の影がはっきりと分かるから、ここに注意していれば建物のおおよその形が分かるだろう？」

「それにしたって、これじゃあ建物の近くまで来なきゃ分からないじゃあないですか。これじゃあ、あたし、きっとここに来る度に壁にぶつかんなきゃならないと思います。」

分かるような気がするが、今はそんなことまで心配している暇はない。

「博士、文化部の佛木です。入れて戴けませんか？」

適当なところでソルトリバー博士に呼びかけてみる。過去2回の訪問ではこれで自動的に道が示されたんだが、今回は反応がない。ひよっとすると何かの制作に取りかかっているのかもしれない。

「博士にどうしても頼みたいことがあるのですが。」

念の為もう1度呼びかける。返事をしないのが単に寝ていただけ…なんてことだったら、ちょっと悲しい。

…と、耳元で急に甲高い声が響いた。

「えーっ、ここいらで小嘶なんかを一つお付き合い戴きます。隣の塀に囲いができたってねえ。へい、そりゃかっこいい…。ああ、また間違えてしまった。こりゃ、やっぱり真打ちになるのは無理なんやろかねえ。」

な…、なんなんだ、こいつは…。

「きゃあー！口のお化け。」

どう形容したらいいのか…。強いて形容するなら唇だけが空中に浮いて喋っているという…、やっ

ぱり口のお化けで当たっている。

その口のお化けは逃げ回っているお嬢さんの後を追いかけて回し、何やら言い訳めいて言葉をわめき散らしている。

「ストップ！」

また律義というか何というか、べつにゲームをやっている訳でもないというのに、私がストップと言った途端、そのままの姿勢で静止している。

「お嬢さん、なにもそんな難しい体勢で静止しなくてもいいんですけど。」

「つい、反射的に止まらなきゃと思ってえ…。」

お嬢さんはちょっと照れて、普通の姿勢に戻る。

「で、そっちの口のお化け、お前は何なんだ？」

「いや、だからさっきから言ってるやないですか。わいの名前は口先案内人と言います。博士が忙しいので、わいが代わりにあなた方のお相手をしますよって。」

「口先案内人…。」

おもわずお嬢さんと顔を見合わせてしまう。

「で、博士はまた研究中か何かなのかい？」

「ええ、そうです。そういう事情で研究所の中には入れてはいけないということなので、御用はわいが承ります。」

どうする…。こうなったら真面目に宇宙にでも行ってみるか。

「どうする？」

「どうしましょ？」

私も1度くらいはキャティに行ってみたかったし、そろそろ私がこうした行動を取っているのが局長にばれる頃だし、外へ逃げる気なら今のうちだな。

「じゃあ、宇宙へ出たいんだが、船は用意できるか？」

「ええ、そうですな。少々お待ち戴けますか。」

あの唇だけの小さな体のどこに音声を出す装置が入っているんだろう？おまけにどこかとアクセスしているようだし、まったくあの博士にはいつも驚かされる。

「先生、操縦できるんですか？」

「一応、ライセンスは持っているよ。まあ、なんとかなるさ。」

実際、ライセンスを取ってからもう半年以上も船に乗っていない。操縦できるかどうかというと、これがやってみないと分からないといった感じで、お嬢さんの手前こう言ったものの自信はまったくなかった。

何もなかった地面が急にパッキリ開いて、中から妙な船がせり上がってくる。およそ連邦政治局で使用しているものとは形状が違う。いや、こんな形状の物は地球には存在しなかったと言いきってもいい。

どう言ってもいいか分からないが、一番雰囲気として形に近いのはおでんのこんにやくだろう。あの三角に切った奴を縦に串差しにした形。それが一番適切な表現だと思う。

「これでキャティまで行けるか？」

「大丈夫です。ご希望でしたら、もっと遠くでも行きます。」

「いや、キャティまで行ければそれでいい。」

とにかく行ってみよう。その先に何があるのか、それは自分の目で確かめてやる。

第三章 「分岐点」

H. 6. 21. MAR

第四章 「梨壺夢」

「きゃああ、揺れるうう。先生、もっとおとなしい操縦をして下さい。」

「そうでんがな。あんさん、まったく操縦の才能ありませんなあ。わいが交代しましょか。」

「うるさい、こんな船に操縦もへったくれもあるか。」

実際問題として、ソルトリバー研究所を出発してからもう 30 分近くも経とうというのにまだ大気圏内にいた。とにかく、普通の船を期待していた私が間違っていたというべきだろう。

この船はパートマとかいう機構が付いていて、思念波で船を操るようになっていているらしい。私がライセンスを取った時には、こんな莫迦げた訓練はやらなかったんだ。うまく操縦ができなくても、それは私のせいではない。ちなみにパートマとはパーフェクト・オートマチックの略だそうだ。

「あの、いつになったら宇宙へ出るんでしょうか？あたし、なんか気分が悪くなってきたんですけど。」

まったく、ただでさえ 1 人で操縦するのは不安だったというのに、これじゃ不安どころの騒ぎじゃない。

「おい、口先お化け、こいつはどうやったら宇宙に出してくれるんだ？」

「あんさんなあ、わいは口先案内人と言いましたやろ。まったく、それが人に物を訊ねる態度ですか？」

「ああ、分かった、分かった。どうしたらいいのか教えて下さい。これでいいのか？」

「まあ、最後の台詞がちょっと余計ですけど、よろしおます、教えましょ。あんさんの行きたい方向をできるだけ具体的に思い浮かべなはれ。そしたらあとは強く念じるんだす、そこへ行きたいと。そしたらあとは船が勝手に連れていってくれます。」

口先案内人の説明なんぞ最後まで聞いていなかった。とにかく思いつくまま宇宙をイメージした途端、船はあっという間に宇宙へ出たらしい。とにかく、私と小原田は大気圏脱出の衝撃で床に叩き付けられ、あとは何も分からなくなってしまった。ただ、最後に船内に響いた小原田の叫び声と、どこからともなく浮かんだ一つの名前が頭の中でリフレインしていた。

RIAMU…。

そして、不意に現実に戻された。相当強くぶついたらしく、頭がずきずきしている。

「起きなはれ、あんさんが無理しはるから変な場所に来てもうたやないか。どないしはるんですか？」

耳元で口先案内人がわめいている。

「だから、操縦を代わりましょと言うたんに…。」

「う…うるさい！」

わめき続ける口先案内人を叩きつけるつもりで手を振り上げた途端、奴はパーッと手の届かない場所まで逃げてしまう。

「何するんですか？危ないやおまへんか。」

「だったら少しは黙っていてくれ。それでなくても頭が痛いんだから。」

「あんさん、怪我してはるんですか？」

「ぶつけはしたが、怪我はないよ。いいから、少し黙って…。おい、ここはいったいどこなんだ？」
いま気がついた。ここは船の中じゃない。船内に似てはいるが、周囲がガラスで囲まれている。

「どうやらファズアースらしいです。」

「ファズアース…。ファズアースって彗星じゃなかったのか？」

「ちょっと違うようだな。詳しいことは博士に訊いてみないことには分かりまへんが。」

どうということだ？ファズアースが彗星じゃないとすればいったい何なんだ。こんなことならもう少し一般ニュースに目を通しておくんだった。たっちやんの葬儀以来、まともにニュースなんて見ていなかったからな。

そういえば…お嬢さんは？

「おい、小原田は？あいつはどこへ行ったんだ？」

「あのお嬢さんなら、気が付くと同時にどっかへ行きはりました。」

「どうして、私にそれを言わないんだ。」

「そら摂生やがな。あてはこのことをあんさんに教えよと思って、あんさんを起こしたっていうのに。それが起きたと思ったらいきなり叩こうとしはるし、あての言う暇があらへんやんか。」

確かに…、しかしそんなことを言っている場合じゃない。

「で、どっちに行ったんだ？」

「案内します。」

仕方がないんで口先案内人が行く方へとついていく。奴のスピードは結構速く、私は少しばかり足早になる。しかし、ここの建物もいい加減な構造をしているな。いたるところがガラス張りになっていて、少しばかり趣味が悪い。

いや、ガラスだと思っていたその壁も、よおく見ているとガラスではないらしい。少しずつではあるが、ちょっとずつ形を変えている。しかも、ある一定の意思に基づいているかの様に、規則的な形が現れては消えていく。

まるで迷宮の様な道を幾つか通り過ぎ、何回目かの広間に出た時、それまでずっと黙り続けていた口先案内人がやっと口を開いた。

「ここぞでんな。せやけど、えらいエネルギーや。あんさん、すんまへんが、あてがもし変化してしもうたら、諦めておくんなはれや。」

「変化…？」

それから口先案内人の動きが妙に不安定なものになった。確かになんらかのエネルギーを受けているようだが、残念ながら私にはそれが感じられない。

広間を眺めて、ここには私たち以外には誰もいないということを確認してから、口先案内人に文句を言おうとすると、確かに彼は変化を始めていた。

「おい…。」

まるでこの部屋の動きに合わせるかのように少しずつ輪郭が崩れていく。そして、最初に顔が現れて、続いて首、肩、腕…という順に身体ができ上がっていく。最後の足が現れる頃には、この広間もすっかりと形を変えていた。

「ようこそ、ファズアースへ。我々の名前はリアム。我々はあなた方を歓迎します。」

はっきり言って、どう表現していいのか…。男性とも女性ともつかない形態。しかしねいったいどこから現れたんだろう？

「私の仲間を知らないか？この中にいるはずなんだ。」

「保護しています。会いますか？」

「会わせてくれ。」

とりあえず小原田が無事かもしれないと知って、正直ホッとしていた。

そのリアムと名乗る者がポーッと白く光ると、壁の中から小原田が少しずつ出てくる。まるで壁の中に埋っていたようだ。見た目では無事なのかどうなのかの判別はできない。

「この個体はすべて正常です。我々があなた方の言語レベルを調査するのに少し検査させて貰いました。」

こっちの考えが読めるのか？心の中にテレパシーという単語が浮び上がる。

「我々は本来こういう形を持ちません。あなた方の言葉を借りると、我々は精神のみの存在ということになります。」

小原田の身体が完全に壁から出てくるのを待って、私は駆け寄った。

「おい、小原田、大丈夫か？」

小原田の身体を軽く揺さぶってやると、ゆっくりと目を開く。

「あ、先生…。」

「大丈夫か？」

「ここはどこですか？」

一人で立たせると、まだ少しフラフラとしている。

「ここはファズアースの中らしい。」

そうやってリアムを指差した。

「あれは…？」

「リアムと名乗っている。ここファズアースの住人らしいが、まだ詳しいことは何も訊いてない。」

小原田は暫く不思議そうにリアムを見ていて、ふいに口を開いた。

「ファズアースって彗星じゃなかったんですか？」

「私もそう思っていたんだが、どうも違うらしいね。」

「じゃあ、彗星じゃなかったら、いったい何なんですかねえ？」

「それは…。」

そう言われればいったい何なんだ？ニュースパックでも彗星としか言っていなかったし、Ryo先輩も局長も何も教えてくれなかった。

「難しい質問ですね。あなた方の言葉の中で該当する言葉を探し出すと、集合住宅と言うのが一番イメージに近いと思います。」

返答に詰まった私を見て、すかさずリアムが答える。

「集合住宅…、イメージが掴めない。」

「ねえ、つまりはここにはあなた以外にも仲間がいるんだ？」

小原田の質問にリアムは少し戸惑いの表情を見せる。リアムがはっきりとした感情を表に出すのはこれが初めてだ。

「我々はこれで全部ですが…。どうも我々とあなた方とは、言葉の定義にずれがあるようですね。」

なんか厄介なことになってきた。とにかく会話が成り立たないことにはどうにもならない。どうしたものか…。

第五章 「大草原」

私と小原田がファズアースに来てから、私の腕時計でもう一週間が経過していた。この間に私たちとリアムの間では言葉のずれを修正すべく、簡単な情報交換が行なわれ続けていた。お陰でファズアースについてのかなりの情報を得ることができた。

リアムによれば、ファズアースとは宇宙空間を航行している巨大な都市みたいなものの名前だということだった。ただ、細かいことを言えば、地球上での都市とはちょっと違うらしいのだが。

「なあんか、ここにずっといるのも飽きてきましたよねえ。何か面白いものでもないのかしら。」

「あの口先お化けはどこへ行ったんだ？」

「なんでも出口を捜すんだと言って、昨日から壁の中に潜り込んでいますけど。」

変化…というか、奴の全身が現れてからの行動はいま一つ理解できない。まるで気が狂ったかのごとく何かを捜し求めている。

この一週間、私も一応は出口を捜してみたのだが、まるでない手がかりにすぐに諦めてしまった。とにかく、この空間には何も無いのだ。おまけに不定形ときている。捜そうとするだけ無駄な努力としか言いようがない。ただ、不思議なことに食事だけはどこからともなく時間になると出てくる。

「ねえ、あたし達ももう一度何か捜しましょうよ。」

「何かって、何を？」

「ここにいて、ただ何もしないで待っているだけなんて、つまらないじゃあないですか。」

「何もしていない訳じゃないよ。こうしてリアムと情報を交換して…。」

「そうじゃなくてえ、あたしはこのファズアースの中を探検してみたいんです。」

探検がしたくてもできないことは既に分かっている。私達がリアムに存在を許されている空間は、この100畳くらいの何も無い空間だけなのだ。ここには入口もなければ出口もないと言っていい。

「どうやって？」

「口先案内人みたいに壁の中に入ってみましょうよ。」

「それが駄目なことはお嬢さんの方がよく分かっているんじゃないのか。」

そう、この空間の出入口が壁の中にあることは分かっている。リアムはいつも壁の中から現れるのだ。しかし、壁の中では私達は呼吸ができなくなってしまう。

小原田は3日前に壁の中に入り、リアムに助けられている。

「だって…、だからって、ここで毎日ボーッとしていたって、しょうがないじゃないですか。それだったら、駄目だと分かっているでももう一度壁の中に入ってみましょうよ。」

もちろん、それが私一人だったらとっくにそうしている。しかし、小原田にまで危険な真似をさせる訳にはいかない。

「分かった。しかし、危険だと分かっている、お嬢さんを壁の中に入れる訳にはいかない。リアムと交渉してみるから、それまではおとなしくしててくれ。」

「はあ…。」

小原田にそう言ってから、チラッと自分の腕時計を眺める。まだこの時間ではリアムが来る時間じゃないな…。

「おーい、聞こえるか。用がある、ちょっと来てくれ。」

やっぱり、無理か…。リアムがいつも現れる壁には何も変化がない。

「リアムさあーん。来て貰えませんかあ。」

小原田が叫ぶ。できたら私の耳で叫ぶのだけは勘弁して欲しかった。しかし、意外とこの高い声がよかったのかもしれない。リアムが顔を出した。

「何か用ですか？」

いつもと違う方角の壁から現れたリアムに、2人してちょっとびっくりする。

「えーっと、外に出たい。もう、この部屋に閉じ込められているのには我慢ができないんだ。ファズアースの中を自由に行動できるようにしてくれ。」

リアムはちょっと悲しそうな表情を見せると、黙って肯く。しかし、次の瞬間にはもう別の表情に変わっていた。今度のは…、そう困惑しているかのようだった。

「我々はあなた方がここから移動しないのは、あなた方に理由があるからとっていたのですが。それとも、あなた方にとって何か障害になる物が存在しているのでしょうか？」

「壁だ。この壁が私達の行動を妨げているんだ。これを取り除いて欲しい。」

「これはファズアースその物の一部です。どこにも移動することはできません。それに、これは壁ではありません。道…と言った方があなた方の概念に近いと思います。」

「壁ではなく、道だと…？」

確かにリアムは壁の中を通ってここへ現れる。その様子から推測すればそういう結論が出ないこともない。しかし、現実問題として、私達はそこを道にすることができないのだ。

「しかし、私達はその中では呼吸が困難になり、また視界も遮られてしまう。とても自由に行動ができる状態じゃないんだ。」

「それはありえません。もし、それが真実だとすれば、その原因はあなた方の中にあると言えます。」
こっちに原因があるって…？いったい、どういうことなんだ。

リアムは何か分かったのか、何回か肯く素振りを見せると、不意にかき消すように見えなくなった。

「どうしましょう？」

小原田はリアムが消えたことには、とくに何も反応を示さなかった。まるでそれが当然だとでもいうように…。

「どうするって？」

「ですから、リアムはああいう風に言っているんだから、試してみてもいいんじゃないかなあって思うんですけど。」

「しかし…。」

「それに、あたしは答えを見つけてしまったような気がするんです。」

「答えって？」

答えと言ったって、何が分からないのかも分からない状態だというのに、いったい何の答えを見つけたと言うんだ。

「つまりですね、あたし達はここから外に出れないんじゃないじゃなくて、真剣に外に出ようとしていないだけなんじゃないかと思うんです。この壁だって、本当は何もなくて、ただそういう風に見えるだけなのかもしれない。」

まあ、確かにお嬢さんの言うことにも一理あるとは思いますが、そんなんで事が簡単に済むんだったら苦労はしなかった筈だ。

「あたしが呼吸が苦しいと思ったのは、あたしが圧迫する壁のイメージから勝手にそう思ってしま

っただけなのかもしれないし。」

しかし、私はもう一度考えなくてはいけないのかもしれない。私達が何でここへ来たのか、何故ここにいるのか、そして何をしなければならぬのか。

そうだ、せっかく念願の宇宙へ出たというのに、私はまだ何もしていないじゃないか。私は宇宙へ出て、それから何をするつもりだったんだ…？

たっちゃんは宇宙を翔び回ることが夢だと言っていた。くまさんは人類の生きる可能性を宇宙で捜すと言っていた。明子ちゃんはシュレディンガーの猫にもう一度会う為にキャティに行った。小原田だってそうだ。平凡な毎日よりも特別な明日が欲しくてここまで来たんだ。いまさら私だけが後戻りする訳にはいかないか…。

「よし、分かった！」

私が暫く考え込んでいたのに、急に大きな声を出したので、小原田がビクツとした表情で私の顔を見る。

「ここから出てみよう。外に出るんだ。口先案内人を捜そう。」

目的が決まれば、あとはあれこれ考えてみても仕方がない。とにかく、いつもリアムが現れる壁に向かって突進した。

思っていたよりかはそんなに息苦しくない。進もうと思えば進めないこともない。これだったら、意外と外に出るのは簡単かもしれない。小原田は…と思って振り返ると、結構平気そうな顔をしている。

「大丈夫か…？」

「ええ、何ともないです。やっぱり、気にしない方がいいみたいですね。」

確かにそんなものかもしれない。しかし、どうせならもっと視界が開けてくれるとありがたい。

…と、ふいに周囲が急に明るくなる。しかし、まだ全部が見渡せる状態ではない。

「少し明るくなりましたねえ。でも、どうせならもっと遠くまで全部見渡せれば楽でいいのに…。」

思わず小原田の台詞に納得した途端に、視界が更に広がった。しかし、それでも壁のブヨブヨとした感触だけは残っている。見えない壁は確かにそこに存在するのだ。

「小原田、どこでもいい。いま一番行きたい場所を思い浮べてくれ。」

「えっ…？」

「思い浮べたら、そこに行きたいと念じるんだ。」

「あ、はい…。」

小原田が言ったこと、それ自体は間違っていないと思う。しかし、それだけでは何かが足りないのだ。私の考えが間違っていなければ、その足りないものがこれで分かるはず…。

瞬間、目の中が緑色でただ一色になった。緑と言っても濃い緑色ではなく、どちらかと言えば若草色に近い黄緑色が一面に揺れている。

「うわあ…！」

私達は完全に壁の呪縛から逃れていた。もう、見えない壁は存在しない。

「こんなことって…、これって草原って言うんですよね？」

「ああ、私もビデオディスクで見たことがあるだけだけどね。しかし、よくこんな風景を知っていたな。」

「何かの本で読んだんです。地球にはもう残っていないけど、木星に行けばまだ残っているって。」

本当のこと言うと、あたしはこういう風景が見たくて宇宙へ出たかったんです。」

「そうか…。」

小原田が心の底から見たかった風景がこれか…。ということは…、なんとなく嬉しくなってきた。

この子は決してドロップアウトなんかしていない。それがよく分かったからだ。

風が出てきた。草が一斉にお辞儀する。まるで私達を出迎えてくれたようだ。

「行こうか？」

「どこへ行くんですか？」

「どこへでも。でも、まず地球に連絡しないとね。」

「みんな、驚きますね。」

「たぶんね。」

もうどこにでも歩いて行けるだろう。私は草を踏み締める感触を楽しんで、そしてゆっくりと歩き始めた。

第五章 「大草原」

H. 6. 21. MAR

第六章 「太陽風」

私達は再び口先案内人と合流していた。どういうわけだか、彼の姿はまた元の口だけに戻っていた。

「いやあ、なんとか修理しましたけどな、地球に帰れるかどうかはあんさん次第ってとこでんな。」

「それなら大丈夫。もう、こいつの操縦には慣れたよ。」

「本当でっか？」

「くどいっ！」

「そんなら、それでよろしおます。」

口先案内人はすごとと宇宙船の中へと消える。

「そんなにいじめなくても…。」

小原田は口先案内人を横目で追いながら、私を責めるような目つきをする。

「べつにいじめている訳じゃない。」

分かってはいるんだ。彼がこの数日間、この船の修理にどんなに苦労していたかということも…。

「で、地球に戻るんですか？」

「さあ、どうしようか？とりあえずは地球に連絡を入れなきゃ。うまくすれば *Ryo* 先輩と連絡が取れるかもしれないし。」

「きゃあ、*Ryo* 先輩が来ているんですか？」

「もしかしたらただけどね。少なくとも、このファズアースに関係しているのは確かだから。うまい具合に近くまで来ていたら、話しくらいはできるだろう。」

実際問題として *Ryo* 先輩と連絡が取れる可能性なんて1%もない気がする。情報部の人間はみんな特殊なコールサインを使っているし、まして私は通信の初歩すらやったことがないのだ。

まあ、とりあえずやれるだけやってみて、それで駄目だったらこの船で自力で帰るだけだ。

「おーい、口先お化け。」

「なんでっかあ？」

コックピットに入っていくと、口先案内人が既に計器類のチェックを始めている。

「地球と連絡が取りたいんだけど、どうしたらいいんだ？」

「ほなら、そのヘッドセットでやっておくんなはれ。でも、地球の誰に連絡するんでっか？」

「できたら、連邦政治局の信州局と直接話しができるが一番いいんだが…。」

「あんさんなあ、ここをどこだと思っているんでっか？」

「どこって？」

「ここは太陽系からかなり離れているんでっせ。こんな貧弱な通信装置でまともに届くと思ってまんのか。地球上のどこまで指定できますかいな。」

まあ、口先案内人の言うことの方がもっともだ。

「駄目か？」

「駄目です。」

「きっぱり言うんだな。それじゃあ、誰でもいいよ。」

「やってみましょ。」

口先案内人がスイッチを入れていくと、順番に船のパワーが入る。パネルのインジケーターが、赤、黄、緑、の順で点灯していく。

「ああ、あんさん、運が悪いでんなあ。こりゃ、地球まで届いてもノイズが大きくて、ちゃんと聞き取れるかどうか分かりませんで。」

こいつが何をやっているのかは全然分からないが、なんとなく苦労しているんだなということだけは分かる。

「どうしたんだ？」

「ちょうどここと地球との直線上に太陽が邪魔してはりますねん。それも運悪く黒点の活動が活発やさかい、この船の通信機じゃ太陽風の影響をもろに拾ってしまいますのや。」

うーん、ちゃんと教育を受けていれば、現在の各ステーションの位置が分かるんだろうけど、生憎と私はまだそこまで勉強していない。

しかし、ステーションのどこか一カ所でもこっちの電波を拾ってくれば、なんとか地球と連絡が取れるんだが…。

「こ…ちら、信…局…です。…どうぞ。」

突然スピーカーが音を流すが、とても内容までは聞き取れない。

「こちら信州局文化部長佛木。信州局、聞こえますか？」

こちらからもメッセージを送ってみるが、スピーカーから聞こえてくる音はノイズが多くて、何を言っているのかまったく分からない。おそらく向こうでも同じことを思っているだろう。

「どうも無理みたいですねえ。こんな時に *Ryo* 先輩でも聞いててくれるとラッキーなんですけどねえ。」

小原田がそう言った途端、目の前のモニターに星座が浮かぶ。射手座の絵のデザイン、誰かのコールサインだ。

「まあ、きっと *Ryo* 先輩ですよ。」

さっと頭の中で *Ryo* 先輩の誕生日を思い出す。*Ryo* 先輩は射手座生まれだ、確かに考えられないことではない。しかし、コールサインの返信の仕方が分からない。

「先生貸して下さい。あたしがやりますから。」

「小原田、分かるのか？」

「篝ちゃんに前に聞いたことがあるんです。あたし、やってみますから。」

小原田が何やらパネルを操作する。何をやっているかはまったく分からないが、どうやらそれは正しかったらしい。*Ryo* 先輩の声が響く。

「こちら情報部所属ブルーバー、佛木、聞こえるか？」

「ほら、やっぱり *Ryo* 先輩だった。」

そうか、その手があったっけ。ここでは具体的な希望はそのまま現実に影響するんだ。初めからそうすればよかった。

「*Ryo* 先輩、よく聞こえます。」

「お前の目茶苦茶な行動のお陰で、信州は大騒ぎしているよ。何を考えとんのじゃ。」

「弁解は信州に戻ってからにします。とりあえずこっちの通信機じゃ地球まで届かないんで、研修生は無事だということを局長に伝えて貰えますか？」

「ああ、分かった。で、自力で帰れるのか？」

「まあ、なんとか…。」

「じゃあ、信州で会おう。」

「はい。」

モニターのコールサインが消える。

さて、無事に地球に帰れるか…、いや、そうだな…。やってみる価値は充分あるな。

「大丈夫ですか？」

「任せなさい。ちゃんと地球まで送り届けるから。」

「そうじゃなくて、地球に帰ったら、怒られるんじゃないんですか？」

「気にしなさんな」

小原田の頭を軽く叩くと、コックピットに向い合った。こいつの操縦方法はだいたい頭に入っている。私の考えではこれであまくいくはずだ。

ゆっくりと深呼吸をすると、心の中で一つの考えをまとめ始める。

最大限安全を考慮し、地球のソルトリバー研究所に帰りたい。

あとは難しいことを考える必要はない。できる限り具体的な希望を考えてやれば、あとはファズアースと宇宙船に任せればいい。

これ以上はないという程のゆっくりとした発進に続いて、規則正しい振動が伝わってくる。最初に操縦した時とは大違いだ。なんとなく笑いが込み上げてくる。

「あっ、リアムに帰るって言ってない。」

「大丈夫、リアムは分かっているよ。でも、どうしても心配なら心の中でそう念じればいい。まだファズアースの中だから、リアムに伝わるはずだよ。」

「はい。」

小原田が何やらブツブツと言っている間にも、宇宙船はどんどんファズアースから離れていく。

いつか…、いつか絶対にここにもう一度来てみせる。それがファズアースへの最後の台詞になった。

第六章 「太陽風」

『見渡す限りの草原を抱いて』 —空翔ける羊飼いの群れシリーズ 2—

H. 6. 22. MAR